

精神疾患関連グループホームでの活動

グループホームたんぽぽ

施設長 矢野敬子

西播磨の地域に根付く精神科病院である揖保川病院に併設された事業所グループホームは、たんぽぽ・のぞみ・なごみとの3つの施設からなり、定員19名である。

精神障害者が退院して地域の生活を始めようとするとき、ネックになるのは生活習慣の確立、住まいや生活費の確保である。地域で暮らすための住居として存在し、共同生活の場における日常生活上の世話がグループホームの役割である。

当施設は利用者が地域生活を送るために一緒に住み、スタッフによる日中の支援を提供する住居である。生活の不安や家事が苦手という様々な声にスタッフが個々に応じた安心した生活や、社会とのつながりを広げる暮らしを送れるように支えている。スタッフはサービス管理者、生活支援者、世話人等で構成し、利用者の支援を行っている。

揖保川病院グループホームでの現状と活動を報告する。

現在の入所者数は16名で、当施設の利用者の多くは統合失調症であり、高年齢、長期入院後の長期入所者である。身体合併症が多く、生活は主に障害年金や生活保護の受給者が多い。そのほとんどが家族関係も希薄なため、自宅での生活は難しい状況である。

当施設での支援内容は、次の通りである。①食事：他の利用者分も作る当番制と宅配サービス・給食注文などの利用をしている。②治療の継続：服薬については基本自己管理が出来ているので、揖保川病院への診察同行や必要時のみ他院への通院同行をしている。③社会的な生活の管理：金銭の自己管理と役所などの諸手続きはほとんどスタッフ管理から本人管理に移行できている。④日中の活動：デイケア・作業療法には16名全員が参加し、就労継続支援B型作業所にも3名が参加している。

支援内容は利用者とスタッフ間で「運営ミーティング」を行い、利用者の希望に沿える支援を心がけている。支援の利用は地域の事業所と連携し、地域の事業所で作成されるサービス利用計画書に沿って、グループホーム内で利用者の個別支援計画書を作成している。また、揖保川病院入院中の退院支援開始時からグループホーム入所後も継続した活動できる内容とするために、デイケアスタッフや揖保川病院の精神保健福祉士とも情報交換し、支援につなげている。さらに、療養病棟の入院患者・看護師とグループホーム利用やスタッフとの交流会を計画し、地域での生活に目をむける機会としている。しかし、精神障害者の長期利用者の地域への復帰は非常に困難であり、平成30年度は自宅退所1名、再入院3名（精神症状悪化・希望入院・内科治療）であった。

今後の課題として、地域生活に移行できるように援助するだけでなく、①入院患者が、退院前から地域生活したいと思うような働きかけへの工夫をする。②利用者が自分で決めた生活を支援する。ことが大切になるので多職種と連携しながらよりよい支援につながる活動を続けていきたいと思っている。